



# SSH 通信



広島大学附属高等学校

SSH 通信作成委員

2025 年度 第 10 号

2026 年 3 月 19 日発行

皆さんこんにちは。2025 年度の SSH 通信作成委員です。この SSH 通信では、本校の SSH プログラムの 1 年間の活動をお伝えしていきます。本年度最後となる第 10 号では、2 月 20 日（金）に実施された SSH の日（課題研究成果発表会）についてお知らせします。

## <概要>

会 場：本校体育館（開会式・ポスター発表）、講堂（SSH 活動報告会・閉会式）

発表者：本校高校Ⅱ年生（AS コース 12 グループ・GS コース 31 グループ）

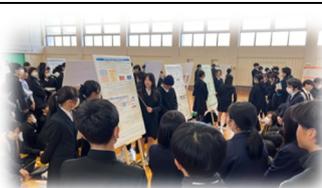
一般参加校生徒（長崎県立大村高等学校 5 グループ、広島県立西条農業高等学校 2 グループ）

参加者：本校 SSH 運営指導委員・研究協力委員、広島大学教職員、本校卒業生（指導助言者）、本校教職員、

本校高校Ⅰ年生、附属中学校 3 年生、本校保護者、一般参加者（高等学校教員など）

発表時間：各グループ 20 分（質疑応答を含む）× 2 ターン

## <発表を通じて得た学び（高校Ⅱ年生）>



・ポスター発表の利点は、その場ですぐに指摘を得られるところだと思います。私たちは植物を育てる実験を行いました。質疑応答を通して、条件設定や環境の管理に想定以上の課題があったことを認識しました。指摘を受けたことで、狭い視野に陥らず広い視点で条件や環境要因を見直す重要性を学びました。（音楽：音楽が植物の成長に与える影響について）

・私たちが行っている研究の内容には高校で学習する範囲を越える部分があり、前回の中間発表会では聴衆によっては理解が難しいという課題がありました。同じ科目の別チームが視覚的ツール

を用いた発表をしており、可視的な資料の有効性に気づきました。そこで今回は、反省を踏まえてパソコンと Excel でグラフを提示しながら発表し、聴衆の理解促進を図りました。口頭のみでなく物理的・視覚的手段を併用する工夫が重要ということを学びました。

（数学：数式で予測する感染のひろがり ～感染者数はどう増えどう減るのか～）

・私たちは「フィルター（「えー」などの言葉つなぎ）」の使用に関する研究を実施し、調査や分析を行いました。「授業者のフィルター使用と授業進行に相関関係や論理的な結論は出ず、無関係であった」という結論になりました。想定していた結果は得られませんでした。が、「関係がない」という結果そのものも重要な知見であると学びました。（国語：フィルターは授業を動かすのか？）

・20 分の発表時間を自由に使えたこともあり、発表を重ねる中で聴衆の反応を見ながら言い回しの難しい部分を修正することができました。その結果、初回の発表と比べると終盤の発表では分かりやすさを向上させることができたと思います。発表のたびに相手が変わるので、アドリブ力や即興性が求められました。台本通りに発表するよりも、聴衆とのコミュニケーションを大切にしながら発表することのほうが重要であると感じました。（英語：国際的に受け入れられやすいアプリケーション名の考察）

## <これからの論文作成に向けて（高校Ⅱ年生）>

・私たちのグループは二人乗りエスカレーターの一列利用が生じる理由について研究しています。広島駅で実地調査を行った際、先入観が調査設計に入り、それが結果的に発表時のわかりにくさにつながっていると指摘を受けました。今後は論文を作成していくことになりませんが、調査方法の部分より客観的かつ詳細に説明しながら、読者に分かりやすい形に改善していこうと考えています。（公民：エスカレーターの片側開け・歩行の要因）

・質疑応答ではシミュレーションの条件付けについて指摘を受け、様々なエージェントの数や種類、災害の状況や時間の設定などを様々に変えながら、複数のシミュレーションを何度も行うことの大切さを学びました。これから論文作成に向けて、反復により標本数を増やし、データの信頼性を高めていきたいです。また収集したデータをもとに改めて考察を行い、最適な避難経路について検討していく予定です。（数学：地震発生時における尾道駅周辺の避難シミュレーション）



## <発表を聞いて得た学び（高校Ⅰ年生）>

・先輩方の発表を聞いて、各グループがそれぞれのテーマや目的に沿って、多様な調査方法を用いながら研究を進めていることを感じました。結果を示すだけでなく、調査方法の適切さや今後の方向性を客観的に見つめるという意味でも、意義のある場だったと思います。これから自分たちが研究を進めていく際にも、多角的な視点から課題を捉えながら取り組んでいきたいと感じました。



・未知のことは、私たちの身の回りに数多く存在しています。しかし、それらを日常生活の中で見つけ出すのはとても難しいことです。私は研究テーマを決めていく中で、そのことを強く実感しました。しかし、先輩方の発表を聞いて、題材は意外にも身近なところにあるのだと感じました。何気なく過ごしていた土地、何気なく読んでいた本、何気なく目にしてきた既知の問題。そのような「何気ない」ものの中にさまざまな気づきを見出すことができ、とてもよい経験になりました。

第 10 号が今年度 SSH 通信の最終号となります。1 年間、ご愛読いただきありがとうございました。